

24) 当院における propofol の使用状況とその有用性

丸山 正則・西巻 浩伸 (新潟県立中央病院)
土田真奈美・和栗 紀子 (麻酔科)

平成8年2～4月の3ヶ月間に194例のプロポフォール麻酔を経験したので、これらを総括し、その有用性について報告する。始めから麻酔導入のみを意図した症例はなく、途中で維持困難なため吸入麻酔に変更を余儀なくされた症例は2例で、他は全て鎮痛薬併用による麻酔維持症例であった。プロポフォールにより麻酔維持されたのは全全麻症例の63%であった。導入量はミダゾラム前投与下では多くの報告に見られる2mg/kgを必要としなかった。22%で筋弛緩薬を使用せずに維持された。鎮痛薬として50%で笑気、硬膜外麻酔が併用されていた。33%に血圧低下が見られたが、対処可能なものであり、それ以上の重篤な副作用は認められなかった。以上よりプロポフォールには絶対的な禁忌は少なく、幅広く臨床応用可能な麻酔薬と考えられた。

II. 特別講演

「高齢者の疼痛管理をめぐる」

札幌医科大学医学部麻酔学講座教授
並木 昭 義 先生

第48回長岡地区循環器懇話会

日 時 平成8年6月14日(金)
午後7時～午後9時
場 所 長岡市健康センター

一般演題

1) 血清 CPK の上昇により発見された多発性筋炎、心筋炎を伴うシェーグレン症候群の1例

永井 恒雄・山崎ユウ子 (長岡赤十字病院)
江部 克也・脇屋 義彦 (循環器内科)

膠原病に伴う心病変はそれほど珍しい合併症ではないが今回シェーグレン症候群に多発性筋炎さらにおそらく心筋炎も合併し、たまたま血清 CPK の異常から発見

された症例を経験したので報告する。

症例は73歳の女性。歩行時のふらつき、口渇、目のゴロゴロ感を主訴に近医を受診し心電図には著変なくも血清 CPK の異常高値を指摘され当院に紹介された。

口渇、目の違和感は眼科、耳鼻科での検査でシェーグレン症候群によるものと判明し免疫学的検査で抗核抗体陽性、補体の低下、免疫グロブリンの増加を認め、神経内科での萎縮した下肢近位筋の生検にて多発性筋炎の診断が得られた。血清 CPK 値は入院後も高値(1,000～2,000 IU)で分画は CPK-B が主体で心筋炎を疑い Ga シンチや心筋生検を施行したが陽性像は得られなかった。治療は患者が高齢のためステロイド剤は投与せず外来にて経過観察を行っている。

2) 急性心筋梗塞の発症から治療までの所要時間の検討

佐伯 牧彦・小玉 誠 (長岡中央総合病院)
内科

【目的】この1年間に当科で治療した急性心筋梗塞(AMI)の、発症から受診までの時間(受診時間)と予後の関係を調べ、併せてその背景を探る。【方法】症例を症状出現から当院受診までの時間で分け、各々につき死亡数、梗塞サイズ、および背景につき比較する。【症例】症例は31例(男性58%)。年齢は平均67歳。平均受診時間は7時間20分だった。そのうち14例が再灌流療法を受けた。IVT が4例、ICT が5例、最終的に PTCA にいたった症例が5例であった。【結果】急性期に保存療法群の1例を心不全で、再灌流療法群の2例を心破裂で1例をVfで失ったが、いずれも3時間以降に受診した症例(以降群)であった。maxCPK でみた梗塞サイズでは再灌流療法群で3時間未満に受診した症例(未満群)では2,045 IU/L に対し以降群で4,284と有意に差があったのに対して保存療法群では有意差はでなかった(1172 VS 2366)。患者背景では未満群に受診した症例の12例中11例が男性で注目されたが、AMI 全体では受診時間に男女の有意差はなかった。【結論】当院における AMI 症例は受診時間が長く、再灌流療法の恩恵は受けていない。男性の一部に早期に受診する群があり、再灌流療法にて明らかに梗塞サイズの縮小が認められた。【まとめ】住民教育によりより早い受診を啓蒙していく必要がある。